

仙台城茶室「残月亭」と石州流清水派



仙台藩茶道石州流清水派

御供真人

曇りなき 心の月を先立てて 浮世の闇を 照らしてぞ行く

（仙台藩祖伊達政宗公辞世）



図1 復元されることになった焼失前の仙台城大手門と隅櫓（仙台市教育委員会ホームページより引用）

仙台市は、令和十八年（二〇三六）の政宗公没後四百年を記念して、戦災で焼失するまで国宝であつた仙台城大手門と隅櫓（図1）の復元を目指すことになりました。仙台城は青葉山に築かれたことから青葉城の雅称で親しまれており、現在、仙台城史跡を含む青葉山公園の整備が進められています。

仙台城ゆかりの茶室「残月亭」

「残月亭」といえば千利休が聚楽第に豊臣秀吉御成りのため建てた色付九間書院、また後に少庵が写し現在は表千家に伝えられた「残月亭」が有名です。一方、青葉山公園内の仙台市博物館前にも「残月亭」という茶室が保存されていますが、これは仙台城ゆかりの茶室「残月亭」の名称を受け継いだとされる「旧姉歯家茶室」のことです。平成八年（一九九六）に姉歯家より仙台市に寄付され、平成九年（一九九七）七月一日仙台市指定有形文化財に指定されました。将来は青葉山公園基本計画にある日本庭園に移築復元すると計画されましたが、庭園整備まで時間を要することから平成十二年（二〇〇〇）に三の丸（東丸）跡にある仙台市博物館前に暫定的に移築復元され、現在に至つ

旧姉歯家茶室「残月亭」



図2 三の丸（東丸）跡にある「旧姉歯家茶室」
(仙台市ホームページより引用)

てあります（図2）。仙台市は、青葉山や仙台城史跡の自然や歴史文化の基本情報を知ることのできる、青葉山公園の（仮称）公園センター整備を、令和五年（二〇二三）春に開催の全国都市緑化フェアにあわせて進めており、同センターの庭園に移築されるものと思われます。

しかし乍ら、この旧姉歯家茶室「残月亭」は、仙台城にかつて存在していた茶室「残月亭」ではなく、その名称を受け継いだ茶室です。幕末の仙台藩の重臣として活躍し、明治には伊達家家令となり初代仙台区長（後の仙台市長に相当）を勤めた松倉恂（良輔・一八二七～一九〇四）が、明治中期に仙台土樋の屋敷内に建てたものです。その後姉歯家所有となつて昭和初期と戦後の二度移築（鹿妻、石巻）されました。松倉恂の日誌によれば、この茶室を「残月亭」と命名するにあたり、伊達家当主（十四代藩主伊達宗基公・伯爵・一八六六～一九一七）に名称の使用と扁額の製作を願い出て許可を受けています。この扁額は、裏銘によれば「正徳四年（一七一四）に五代藩主伊達吉村公が伊達政宗公の筆跡になる残月亭の扁額を模刻したものを、明治二十七年（一八九四）に木村香雨により更に模刻したもの」とされております。この建物は四畳半の畳敷の茶室を中心とし、水屋、台所、縁が付き、屋根は寄棟造鉄板葺で、保存状態良好な明治中期の書院風茶室の遺構として貴重なもの

です。

仙台城茶室「残月亭」と仙台藩茶道「石州流清水派」（当流）の歴史

では、仙台城の茶室「残月亭」とはどのようなものだったのでしょうか。平成十一年（一九九九）に仙台市からの委託で佐藤巧東北大學名譽教授主宰の佐藤巧吉建築研究会がまとめた調査報告書『仙台市指定有形文化財旧姉歯家住宅茶室「残月亭」修復工事報告書』の『補説仙台城内における伊達家茶室「残月亭」沿革考』（以下「残月亭報告書」）及び十世清水道鑑著『清水動閑註解石州流三百箇條付仙台藩茶道』をもとに、当流の歴史と共に見てまいります。

藩祖政宗公（貞山公・一五六七～一六三六）時代

前に述べた正徳四年の扁額「残月亭」の裏銘に「此額元我高祖黄門公（＝政宗公）之真蹟也」とあることから、政宗公時代に「残月亭」の額を懸けた茶室があつたものと考えられます。政宗公時代の公式記録である『貞山公治家記録』によれば、本丸茶室関係の建物として、廻、数寄屋、数寄屋勝手、鎖ノ間、次ノ間などの名前があり、その使用状況を見ると、数寄屋では客人に茶をもてなし、他はすべて家臣に茶をふるまっていることから、「残月亭」の額を懸けたのはこの数寄屋と考えられます。

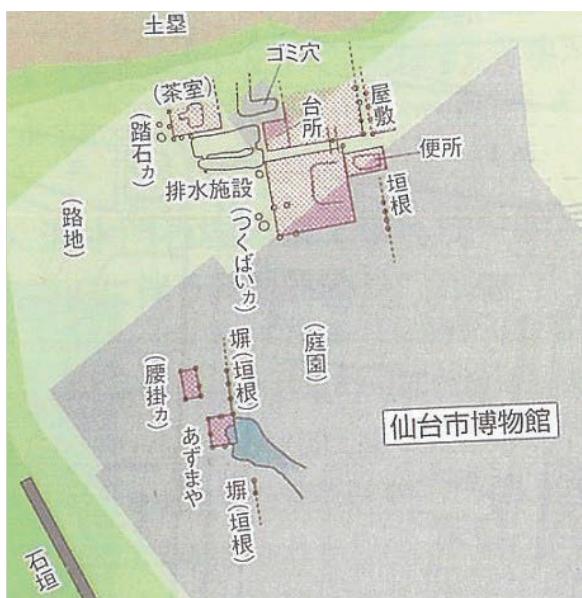


図3 博物館改築に伴う発掘調査で発見された茶室跡等の模式図（仙台市ホームページより引用）

仙台城は、関ヶ原の戦い直後の慶長五年（一六〇〇）十二月に繩張りが行われ、翌年一月より普請、慶長七年（一六〇二）に一応の完成をみたとされています。本丸以外でも西曲輪（後の二の丸、現在の東北大學川内キャンパス付近）で茶や能がしきりに催されております。また東丸（蔵屋敷、現在は三の丸と呼称）からは、昭和五十八年（一九八三）の仙台市立博物館再建の際の発掘調査で、政宗公時代に遡りうると推定された庭園らしき池の跡と、その周辺に礎石をもつ茶室や茶室関係施設とみられる建物群（図3）、更

に元和年号の墨書きのある木簡、茶道具と思われる織部、志野、備前、中国染付を含む国内外の陶磁器、懷石料理の食器類である家紋入りの漆器椀などが多数出土しております。なお、享保六年（一七二一）の『仙台城普請窺写』（仙台市博物館蔵）には東丸が本丸として記されるなど、江戸時代は本丸から東丸までが広義の本丸と認識されていました（第二回仙台城跡保存活用計画等検討委員会（平成三十年一月二十三日）資料十一―一）。

具体的な場所は特定できませんが、『貞山公治家記録』元和三年（一六一七）四月十日条に、「且又御数寄屋新シク相構ラル」と記されていますので、大阪夏の陣の二年後、元和偃武の時代となつて新築された「御数寄屋」が初代「残月亭」であると考えられます。

その数年前に、政宗公は古田織部の高弟清水道閑（一五七九どうかん）を、小堀遠州の推挙により仙台藩の初代の茶道頭として召し抱えております。『貞山公治家記録』慶長十八年（一六一三）十一月九日、幕府御見廻田代養元へ茶を饗した時、横田道斎、小野宗碧と共に清水道閑に相伴を命じたのが初見であり、以降道閑は政宗公の相伴としてしばしば茶席に列した記録があること、また、その後まもなく

く十二月五日条に初めて小堀遠州の名が見え、政宗公が硯二面、鮭子籠五尺に書を添えて遠州に贈ったことが記されており、道閑を世話してもらつた謝礼と考えられます。これら、慶長十八年に召し抱えられたと考えられます。この茶道頭一世道閑は政宗公・忠宗公二代に仕え茶室造営の指導も行つてのことから、元和三年に新築した「御数寄屋」すなわち初代の「残月亭」も一世道閑の指導によつて造られた可能性が高いと言えましょう。

政宗公はその後、寛永四年（一六二七）～（一六二八）、仙台城東南に若林城（現宮城刑務所）を築城しました。幕府には晩年を過ごすための「仙台屋敷構」として許可を得ましたが、実際には城であり、新しい城下町の町割りもして、晩年の政務はこの新たな居城で行つております。政宗公自らが工事の細部まで指揮したと伝えられ、文禄二年（一五九三）の文禄の役で朝鮮から持ち帰った臥龍梅も、はじめ仙台城に植えられ、後に若林城に植え替えられた（現在も宮城刑務所内で仙台市天然記念物「朝鮮ウメ」として毎年花を咲かせています）とされており、「数寄屋」「残月亭」を仙台城から移築した、または「残月亭」扁額を若林城内の茶室に懸け替えた可能性も考えられます。寛永六年（一六二九）に、

若林城の西曲輪で茶会が催されていることから『貞山公治家記録』、城内に茶室があつたことは明らかです。寛永十三年（一六三六）、政宗公は遺言で若林城の取り壊しを命じ、江戸で逝去しました。寛永十六年（一六三九）春には建物が解体され、その一部を仙台城二の丸建築に伴い移築しております『義山公治家記録』及び『茂庭家記録』。平成十六年（一〇〇四）から開始された宮城刑務所の全体改築に伴う発掘調査で、若林城の御殿建物跡や様々な遺構が発見されました。この調査では大量の瓦に加え、陶磁器は美濃、丹波、唐津、肥前などの国産陶器のほか、中国産青花や白磁、そして土師質土器皿や焼塙壺なども出土しましたが、出土数は意外に少なく、陶磁器類も建物同様に廃城に伴つて一ノ丸に移されたことを示しているのかもしれません。

二代藩主伊達忠宗公（義山公・一五九九—一六五八）時代

二代忠宗公は寛永十五年（一六三八）二の丸普請に着手し、同十六年（一六三九）六月には祝儀、同十七年（一六四〇）元日儀式は二の丸にて行いました。『御二之丸御指図』（宮城県図書館蔵）には「御座の間」の南、「書院」の南西部の一段小高いところに、御座の間や書院から廊下で通じる「数

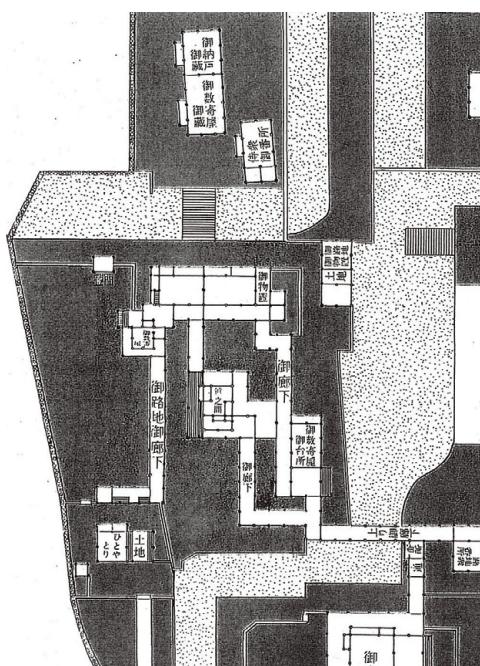


図4 『御二丸御指図』(宮城県図書館蔵)
(残月亭報告書より引用)

寄屋（四畳半台目）、「鍍（くさり）の間」、「数寄屋台所」といった数寄屋屋敷群が描かれております（図4）。これらが政宗公時代から西曲輪にあつたものか、若林城から移築したものか、あるいは新築したものかは不明ですが、『義山公治家記録』寛永二十年（一六四三）十月十五日条に「未明上使酒井作右衛門殿下着：御能畢おえテ数寄屋ニ於テ御茶進ゼラル」と、幕府からの上使を能と茶で饗應したとの記録があり、数寄屋が仙台城の中心的な茶室であつたことは間違ひありません。従つて、この数寄屋に「残月亭」の額が懸けられていたのではないかと推定されます。この数寄屋屋

敷群も、以上述べたこととその造営の時期を考え併せますと、茶道頭一世道閑の指導により建設されたと推察されます。

忠宗公の命により、一世道閑の後は孫であり養子となつた一世清水動閑（一六一四～一六九一）が、片桐石州公の許で十三年間石州流の修業を積んだ後、寛文九年（一六六九）仙台藩の茶道頭に任せられました。一世動閑は、仙台藩の茶道をおそらく一世道閑の織部流から石州流に改め、また、『清水動閑註解石州流三百箇條』（三巻）及び『動閑茶湯書』（十八冊）などを著わし、後の石州流清水派の基盤を築いたと言えましょう。

三代藩主伊達綱宗公（雄山公・一六四〇～一七一一）時代

三代綱宗公は所謂伊達騒動により二年足らずで隠居したため、忠宗公時代と仙台城の構成は変わつておりません。

四代藩主伊達綱村公（青山公・一六五九～一七一九）時代

四代綱村公の時代、多くの茶会が行われたことは『伊達綱村茶会記』に記されており、同茶会記によれば元禄六年（一六九三）から宝永二年（一七〇五）の十三年間で催した茶会は開催日が分かるもので千百回余が記録されています。

す。公式記録の『青山公治家記録』でも数寄屋で一門以下の家臣たちに茶を賜る記事がいくつもあります。

綱村公は元禄五年（一六九二）、二世動閑の後継者に、一門で最も傑出していた馬場道斎を茶道頭として清水姓を名乗らせました。これが三世清水道竿（一六六二～一七三七）であり、茶道の造詣の深かつた綱村公の茶道指南役と言う重責を果たしつつ、一世動閑の石州流と二つの著書の理念を土台にして、さらに創意工夫を凝らして芸術性を高めた石州流清水派を開きました。茶道頭として仙台藩の茶道を石州流清水派としただけでなく、江戸では旗本斎藤頼母、幕府数寄屋組頭谷村三育正英、土佐の茶堂栗原雲佐に石州流清水派を伝授し、齋藤頼母より土佐の高畠小平次、讃岐の片山覚心に伝わるなど、正に石州流清水派の開祖といえる存在です。なお、ここで述べた三世道竿によって石州流清水派が確立する過程の詳細は、十世清水道鑑著『清水動閑註解石州流三百箇條付仙台藩茶道』、『関』十八号「仙台藩茶道の茶道頭・宗家の繼承とその印の三種の文献」、『関』十九号「仙台藩茶道の茶道頭・宗家の繼承とその印の三種の文献（続）」及び『関』二十号「仙台藩茶道石州流清水派の祖三世清水道竿の業績（その1）道竿の経歴と人脈」をご参照下さい。

さて、『肯山公治家記録』元禄四年（一六九一）三月二十六日条に「数寄屋造畢ノ賀儀」とありそれまでの数寄屋を改築したことが分かります。更に、元禄九年（一六九六）十一月十四日条に「寅刻数寄屋敷地鎮、安宅ノ祈祷千手院執行作字奉行伺公」とあつて数寄屋の再度の普請がありました。同十六日条ではこの数寄屋敷が数寄屋の他に門、路地、勝手座敷で構成された、かなり広い茶室関係の屋敷に拡充されたことが明らかとなります。

その様子は元禄十五年（一七〇二）閏八月六日の茶会について、三つの記録から伺い知ることが出来ます。公式記録である『肯山公治家記録』では

「辰下刻数寄屋敷ニ御出、伊達彈正殿、主馬殿へ茶ヲ賜フ晚於団左兵衛殿、助三郎殿、兵庫殿、柳川備中、本多石見ニ茶ヲ賜フ」

とあるのを、『仙台城内外茶会記第八卷』では

「六日朝、数寄屋敷四疊半、彈正殿、主馬殿、帶刀、津田又次郎、宗閑……

同晩、団かき四疊、左兵衛殿、助三郎殿、柳川備中、石見」と記述され、また同記事を『仙台城内外茶会記第九卷』では

「六日朝、鷺庵 四疊半
六日晚、団 かき四疊」

と記されております。綱村公時代、元禄末の数寄屋敷の「数寄屋」は四疊半であり「鷺庵（あひるあん？）」と称していましたこと、また「団」は「かき四疊（欠き四疊？）」三疊台目？と称され数寄屋とは別であつたことが示されています。これらの記述から、この数寄屋＝四疊半＝鷺庵に「残月亭」の額が懸けられていたのではないかと考えられます。

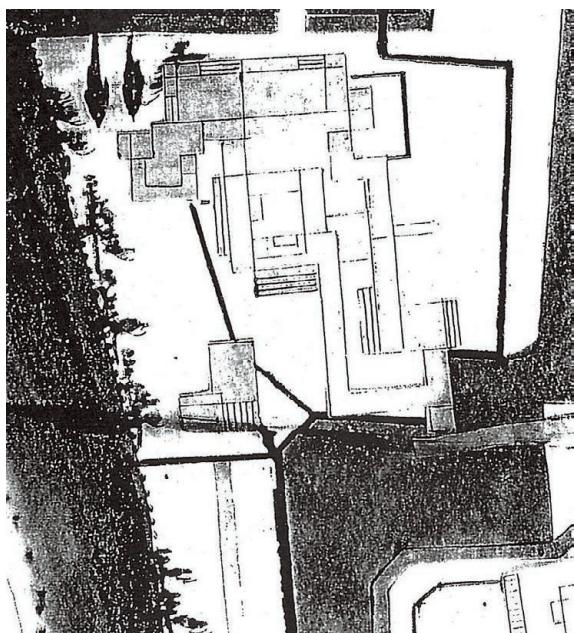


図5 『肯山公造制城郭木写之略図』製作年不明。御二丸御指図とほぼ同じ構成のため、綱村公改築前か。
(宮城県図書館蔵) (残月亭報告書より引用)

五代藩主伊達吉村公（獅山公・一六八〇・一七五一）時代

五代吉村公の時代になつて初めて「残月亭」の名前が現れます。

すなわち公式記録での「残月亭」は『獅山公治家記録』宝永七年（一七一〇）八月三日条に

「立石上之茶亭落成 数寄屋残月亭ノ額ヲ掲ラレ残月亭ト号セラル。於同亭、晚食上之侍食伊達助三郎殿、大町監物、

布施和泉、黒沢要人、篠岡左膳、阿形宗珍、大町清九郎

二營構事務ヲ賞セラレ着服一領ヲ賜フ」

とあるのが初見となります。

続いて正徳四年（一七一四）孟夏に扁額を模刻し、立石上之茶亭に懸け替えています。扁額の裏銘には「此額元我高祖黄門公之真蹟也 恐其久而損壊収為家珍今別臨摹命工雕之以 扁宇云 正徳四年甲午歲孟夏之日」とあり、「前額は藩祖政宗公の真蹟で、長い年月が経過し朽ち損ずるおそれがあるため家宝として収納し、額を新たに模刻した」旨が記されています。

以上の記事から、政宗公真蹟の「残月亭」扁額を掲げた茶室が仙台城に存在していたこと、宝永七年時点でその「残月亭の額」は「数寄屋」に懸けられており、また、それを新たに落成した「立石上之茶亭」に掲けて「残月亭」と号

したことにより、正徳四年に扁額を新調し「立石上之茶亭」に懸け替えたことなどが明らかにされました。

更に享保三年（一七一八）以降享保二十年（一七三五）にかけて御本丸、御二ノ丸御殿から御役所、神社、佛閣等広範にわたって畳敷きを調べあげた『御たゞみ調書』（宮城県図書館蔵）には、次のように記されております。

「、残月御茶屋御上之間 拾壱畳 名取中継表高宮ヘリ 十一

一、御同所次之間 七畳 右同断

一、御同所御勝手 四畳半 右同断

一、御閑所入口 壱畳 三迫表布縁

一、御閑所 貳畳 右同断

一、御水上御茶屋 四畳半 名取中継表布縁

一、残月御茶屋大所 貳拾七畳半 東山片目表

これを見ると「残月御茶屋」が御上之間、次之間、勝手、閑所（便所）、水上御茶屋、大所（台所）の複数棟からなる屋敷となつていることが明らかです。水上御茶屋のみが

独立した四畳半茶室となつており、「残月亭」あるいは「残月御茶屋」とは呼ばれていません。これと「残月亭」すなわち「立石上ノ茶亭」の関係を調べますと、「水上御茶屋」については、「残月亭」上ノ茶亭」落成前、『獅山公治家記

録』宝永七年（一七一〇）六月一日条に

「申刻能畢テ水上茶屋ニ於テ餅菓吸物酒茶菓」

とあること、また、「残月亭||上ノ茶亭」落成後の正徳四年（一七一四）三月二十三日条に

「田村下総守殿登城…上茶亭餅菓吸物公同座ニ進之侍食同上、水上ノ茶亭ニ入セラル即刻本丸懸造ニ登臨、晚饌之上公伴食セラル侍食同上…」

とあり、「上茶亭||残月亭」と「水上ノ茶亭」を区別し、両者は近くにある別個の建物であると言えます。広い意味では「残月御茶屋」屋敷の一部であると同時に、独立した四畳半として存在したため特に

「水上ノ茶亭||水上御茶屋」と呼んで区別していたと推察されます。『獅山公治家記録』正徳四年（一七一四）六月以降は、「上ノ茶亭」に替つて「残月亭」の語が見られ、また「水上御茶屋」及び「水上ノ茶亭」の語は全く見当たりません。これは『御たゞみ調』のとおり「残月亭御茶屋」屋敷の中に吸収統合されたことを意味し、その構成に変化はなかつたことを示していると考えられます。

現在、東北大植物園内に、吉村公時代の「残月亭跡」案内看板が設置されています（図6）。



図6 吉村公時代の残月亭跡の案内看板
(東北大学植物園内) ページより引用)

事業でした。その後、正徳五年（一七一五）には、三世清水道竿が岩出山伊達家屋敷「有備館」に岩出山城本丸の断崖を借景として池中に島を配した廻遊式池泉庭園を作庭しましたほか、仙台藩内各所に三世道竿の作とされる庭園が伝えられており、一部は現在もその姿を残しております。

また、吉村公の描いたとされる「残月亭六歌仙」と称する板額六枚が仙台市立博物館にあります。この六歌仙の額を納めた箱蓋の裏に、四畳半茶室の図が単線で描かれ、東、西、南、北の方位が記入され、西側に向かって左側半分が「床の間」になり、右半分は一畳敷の押込様のものが付いており「茶立口」とも見えます。その「茶立口」と南側長押上に懸けた六枚の額の位置が示されており、次の文書が附されています。『残月亭江掛候御額入記』として「残月亭江懸候様御物置より被相下候ニ付御勝手江相渡置候」と記し、六歌仙の額名が列記され、「右之通掛方致候様吟味致候ニ付相究置候以上」とあり、又、別札には次のように記されています。

「此頃之六歌仙相伺申候所右之通相懸可申由被仰付候間左様御心得可被成候 甲七月九日 奈良坂道育 但し裏江番付合改申候也」

奈良坂道育については、藩公式記録『獅山公治家記録』宝永八年（一七一二）三月十六日条に名前が出ていること、また「道」は石州流清水派の師範に許される名であることがから、当時活躍していた仙台藩茶道方・石州流清水派の高弟であることが推察されます（文末の「追記」参照）。更に、この四畳半茶室の図も「残月御茶屋」屋敷の「水上御茶屋」の可能性が考えられます。

なお、石州流清水派の茶庭及び茶室については、茶道頭の継承者である宗家十一世大泉道鑑師が十八冊からなる『動閑茶湯書』のうち、まず茶庭に関する『露地之書』の解説研究の成果を学術誌『茶の湯文化学』三十三号に掲載され、またその概略を『関』三十号でも分かり易く紹介していますので、ご一読ください。次に、そのなかの茶室に関する『茅葺數寄屋寸法』の解説研究を進めておられ、その成果を学術誌に投稿中であるとのことで、その公表・発表が待たれます。

江戸時代後期

七代伊達重村公（徹山公・一七四二～一七九六）時代の安永年間（一七七〇年代）の作とみられる『残月台本荒萩

卷之一』に、残月亭について次のように述べられています。

「私伝曰。寂光寺は本御本丸に立居たり。今残月亭の辺也。

この残月亭は御本丸、御二丸間にて御二ノ丸御座の間向

北（ママ）高き所に在り。御物見亭なり。又は御軍用の

節物見にもなれり。御下の不及言、遙かに海辺を望み木下、

宮城野も限なし。此残月亭の西後は昔の東海道也。是よ

り大手松木番所へ出、大橋川え出渡り、本荒町の本荒の

里より、宮城野へ行くと見えたり。此残月亭西後海道に

石碑二ツ在り。是則寂光寺の石塔なりと言ふ。又残月亭

の南脇御本丸と御一ノ丸の間を青葉山寂光寺と言ふ。…」

この時の茶道頭は、四世清水道簡（一七一六～一七八三）

です。江戸で幕府数寄屋組頭谷村嘉順正勝、旗本仙石淡路

守政寅徳玄及び田中素白澤玄に石州流清水派の流儀を伝授

し、更にそれが水戸の吉田瑞雪斎及び藤村吉兵衛朴斎に伝

えられました。

なお、筆者が伝承している武術、西法院武安流武者捕は、寛延四年（一七五二）清野治太夫が仙府（仙台）より登米に伝えたとされています。仙台城残月亭で四世道簡が茶道指南をしていた同時期に、仙台城下で開祖大内（松浦）武兵衛武安より清野治太夫が伝授を受けていた事を思うと感

に堪えません。登米に伝えられた同流は治太夫の子新太夫、

後藤源八郎、後藤より柴田文祐勝春と千葉儀右衛門へ相伝。

千葉儀右衛門より袋地亮治、袋地より千葉茂（後の柴田茂）

に伝えられ、また、柴田文祐勝春より子の文策（文作）、

孫の文治と文三郎、文治より孫の茂へと家伝されました。

平成十七年（二〇〇五）柴田茂師より筆者と佐藤豪に免許

皆伝相伝伝授され、令和二年（二〇二〇）筆者より森田恵

輔に免許皆伝を伝授するなど、現在も流儀を絶やさず伝承

しております。

九代伊達周宗公（紹山公・一七九六～一八一二（一八〇九逝去））時代、享和二年（一八〇二）年に書かれた「享和二年之御家御絵図写」（宮城県図書館蔵）は「残月亭」の姿が載っている現在唯一で最後の絵図です（図7）。

「残月亭」の位置は、「因縁殿」の西南方向、「三十間」御蔵のほぼ真西に当たる小高い丘陵上、東北大大学植物園内の残月亭案内看板が設置されている位置（植物園本館裏手）にあります。平面図的にみるとこの「残月亭」は全般的には東西に長い一棟構成の建物となっています。東の室を上の間とし、中の室である次の間、西の室の三の間（下の間）と続く三室構成で、東の室に「残月亭」という文字が書か

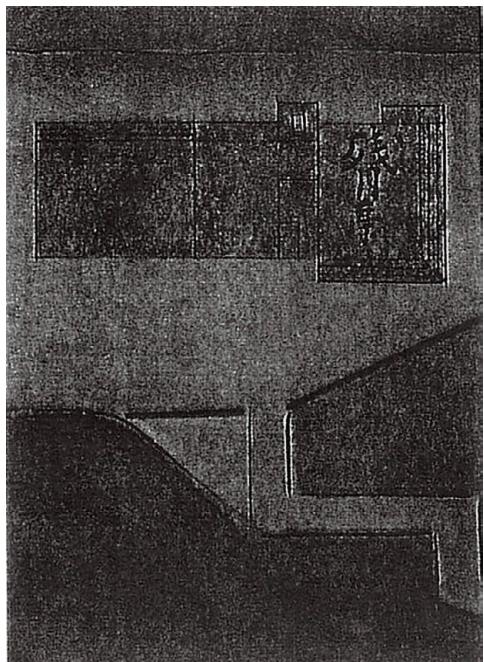


図7 残月亭『享和二年御家作御絵図写』
(宮城県図書館蔵) (残月亭報告書より引用)

れています。単線で間仕切り線が入り、上の間、三の間には縁側が描かれており、他の殿舎の一間四方の方眼などから類推すると、この「残月亭」の規模は次のとおりです。

「残月亭」とある上の間は東西三間、南北三間半の十七畳の座敷で、東側と南側に幅三尺の濡縁を巡らし、北側の東より一間の「床のま」を配しています。次の間は東西三間、南北三間の十八畳敷で、北側東手に約一坪の「閑所」らしきものを設けています。三の間は東西四間、南北三間の二十四畳敷で、北側に幅三尺の濡縁を付けています。この敷地にはこの建物だけで他の茶室関係の施設は見当たりま

せん。畳の部分だけでも合計五十九畳半、約三十坪の堂々たる書院風建築であり、享保年代（吉村公時代）に調査された『御たゞみ調』に記述された「残月御茶屋」の構成、残月御茶屋御上之間（十一畳）、御同所次之間（七畳）、御同所御勝手（四畳半）とあり同じく三室構成で、「閑所」分三畳が付いているのに非常によく似ています。残月御茶屋御大所（台所・二十七畳）と独立した御水上御茶屋（四畳半）の有無など複数棟構成の屋敷群と一棟構成の違い、規模や部屋の広さの違いは、享保年代から約七十年間の間に改修または建て直しがあつた可能性が高いと考えられます。

注目すべき点は、享和二年の残月亭が四畳半茶室ではないことで、おそらく「残月亭」の扁額は三室構造の「上の間」に懸けられていたと思われます。この扁額は、名称初見となつた吉村公時代の宝永七年「立石上ノ茶亭」以降、享保年間の「残月御茶屋御上之間」、この享和二年の「上の間」の約九十年間、独立した四畳半茶室ではなく、仙台城茶室屋敷の上の間に懸けられていましたと考えられます。従つて、屋敷全体を「残月亭」と称し、四畳半茶室である「水上御茶屋」には六歌仙の板額が懸けられていたのではないかと推定されます。

この時茶道頭は、茶道方前田雲東の子の前田直長が四世

道簡の後を継いで五世清水道斎（一七六四～一八〇八）となつております。文化元年（一八〇四）六月二十四日、落雷により二の丸及び中奥が悉く焼失したため、文化六年（一八〇九）に二ノ丸を再建しています。その際に「残月亭」も焼失再建されたか、あるいは焼失を免れたのかは不明ですが、石巻姉歯家に遺っていた織部焼の井戸車の箱書きに

「御茶屋 青葉城内 残月亭
井戸車 天保三年六月御修復之節
拝領之 清水氏」

とあることから、残月亭は天保三年（一八三二）六月に修復したこと、またこの織部焼井戸車は、十二代伊達齊邦公（龍山公・一八一七～一八四一）より茶道頭六世清水道看（一七八九～一八五九）へ、修復の恩賞として下賜されたものであることが明らかです。

六世道看は江戸で幕府数寄屋組頭谷村可順正直、幕府茶道組頭野村休哲勝成、中川道茂看閑に石州流清水派の手前を伝授し、休哲より秋田の笠盛寿仙と越後の山尾助右衛門静江へ、また中川道茂より土佐の上村為山に、それぞれ伝えられました。

江戸時代末期

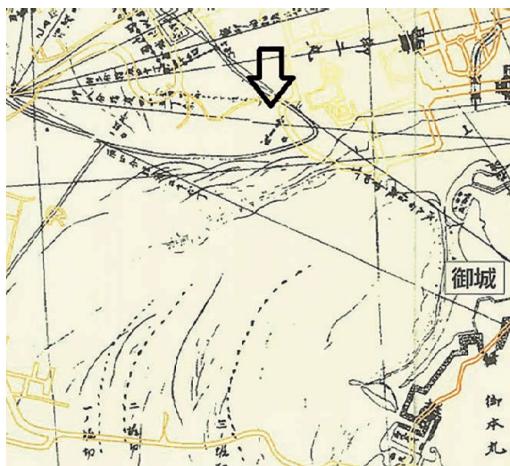


図8 残月亭（『仙台城下現代複合図』より引用）

幕末、十三代伊達慶邦公（一八二五～一八七四）時代の安政三年～六年（一八五六～一八五九）の『安政補正改革仙府絵図』（第二師団司令部蔵、藩政時代最後の絵図と言われば、戦災で焼失。『仙台城下現代複合図』として復元）。令和に入り『安政補正改革仙府絵図【令和版】』が販売中。には、「残月亭」と建物は小さい乍ら明記され、その位置は「御二丸」敷地の西南の方向（現在の東北大学植物園本館裏手）に見えます（図8）。この残月亭の更に西方に「一鼓亭」が、更に西方の高い丘陵頂上に「御茶屋」と記され



図10 佐藤十之進屋敷
(『仙台城下現代複合図』より引用)



図9 清水道幹屋敷
(『仙台城下現代複合図』より引用)

ておりますが、「御城中御崖作り及び大森御茶屋等より所々への方位を朱印して町間を書し、非常の用に備ふ」とあり「大森御茶屋」であることが分かります。この絵図には、本荒町と良覚院丁の角に茶道頭七世「清水道幹」（一八一五～一八六三）の屋敷（現在の晩翠草堂付近）（図9）や、立町に乱舞方（仙台藩の能楽の役所）仕手役（藩主指南役）の喜多流能楽師「佐藤十之進」の屋敷（現在の立町小学校の東隣）も記されています（図10）。

なお、現在も佐藤十之進の子孫である十一代佐藤章雄師、十二代佐藤寛泰師が喜多流職分（能楽師）として活躍されており、仙台や一関をはじめとする旧仙台藩領や東京などで能楽を指導されています。

さて本荒町の茶道頭清水家屋敷は、『文化九年同十四年（一八一二～一八一七）製作仙台城下絵図』にも同じ場所に「清水」と記しており、六世清水道看、七世清水道幹及び八世清水道鑑（どうかん）（一八四〇～一九二二）の三代にわたり同じ屋敷を受け継いでいたことが明らかにされました（『清水動閑註解石州流三百箇條付仙台藩茶道』）。

その屋敷の庭には三百年来の老松、政宗公が秀吉から拝領したという春日燈籠、路地のとび石などがあり、大変見

事なものであつた、特にその老松は高さ四丈九尺（約十五メートル）もあり堂々としていたため、ひときわ人目を惹いた（『河北新報』昭和九年四月十六日付「杜の都を飾る由緒深き銘木」三原良吉氏）とのことで、六世道看の「松濤庵」、七世道幹の「松月庵」、八世道鑑の「松風庵」と、三代の茶道頭の「松」を用いた庵号はこの老松とゆかりがあると伝えられております。八世道鑑の後を継いだ九世落合道鑑（一八八三～一九七二）の「松窓庵」、十世大泉道鑑（一九〇九～一九一〇）の「松翠庵」、十一世大泉道鑑（一九四二～）の「松蒼庵」と、歴代の宗家も「松」を庵号として用い続けております。

明治時代

戊辰戦争を経て仙台城は新政府に接收され、仙台鎮台の本營が置かれます。明治十五年（一八八二）九月の大火で仙台城二ノ丸、仙台鎮台本營が炎上し九割が焼失してしまいます。松倉恂が手記で

「残月亭の三字の扁額ハ藩祖貞山公政宗乃書なり、而して、

戊申変乱の後廃して存せず」

と慨嘆していることから、明治の初期には残月亭は失われ、

十五代伊達邦宗伯爵（一八七〇～一九二三）が大正十年（一九二二）その著『仙台城』の中で

「二ノ丸の西南ニ位シ一邱アリ。御庭ヨリ行程凡ソ十五町。山屋敷道路ニ添フ。邱上ニ茶室アリ、残月亭ト云フ。一二残月御茶屋ト唱フ。板額ヲ懸ケ残月亭ノ三字ヲ刻ス。貞山公ノ御書ナリ。外ニ六歌仙ノ板額六枚ヲ懸ク。今庫中ニ第二十一世獅山公ノ御書六歌仙板額六枚アリ、或ハ其ノ板額ナランカ。残月亭石段ノ下ヲ望亭ト称ス。唯ダ腰掛ヲ存スルノミニシテ、建物トテハナシ…」

と記しているように、ついに跡地だけとなりました。

新たな「残月亭」と石州流清水派

以上見てきたとおり、明治中期に松倉恂が仙台土樋に建て、鹿妻姉歯家、石巻姉歯家に伝えられ、仙台市博物館前に暫定的に復元された旧姉歯家茶室「残月亭」は、仙台城茶室「残月亭」とは直接つながっていないことが分かります。仙台城茶室関係の古材を使用している可能性がありますが、建物の様式的には関連はありません。

しかし松倉恂は仙台藩の重臣として石州流清水派を学んでいることは明らかであり、その松倉が建てた茶室が、伊

表 仙台城残月亭の変遷

残月亭(扁額推定)	規 模	構成	時 期	記 錄	仙台藩主	茶道頭
本丸数寄屋	数寄屋不明	屋敷群	元和三年 (1617)	貞山公治家記録	藩祖伊達政宗公 (1567~1636)	一世清水道闇 (1579~1648)
二ノ丸数寄屋	四疊半台目	屋敷群	寛永十六年 (1639)	義山公治家記録 御二丸御指図	二代伊達忠宗公 (1599~1658)	
二ノ丸数寄屋	不明	屋敷群	元禄四年 (1691)	肯山公治家記録 肯山公造制城郭木写之略図	四代伊達綱村公 (1659~1719)	二世清水道闇 (1614~1691)
二ノ丸数寄屋 「鷺庵」	四疊半	屋敷群	元禄九年 (1696)	肯山公治家記録		
立石上ノ茶亭 「残月亭」	拾壱疊	屋敷群	宝永七年 (1710)	獅山公治家記録	五代伊達吉村公 (1680~1751)	三世清水道竿 (1662~1737)
同「残月亭」 扁額新調			正徳四年 (1714)	「残月亭」扁額 奈良坂道育「六歌仙」板額		
残月御茶屋 御上之間			享保三年~二十年 (1718~1735)	御たゞみ調書		
残月亭	不明	不明	安永年間 (1770年代)	残月台本荒萩	七代伊達重村公 (1742~1796)	四世清水道簡 (1716~1783)
残月亭（上の間）	十七疊	一棟型	享和二年 (1802)	享和二年之御家御絵図写	九代伊達周宗公 (1796~1812)	五世清水道斎 (1764~1808)
同修復	不明	一棟型	天保三年 (1832)	織部焼井戸車箱書き	十二代伊達齊邦公 (1817~1841)	六世清水道看 (1789~1859)
残月亭（上の間）	不明	一棟型	安政三年~六年 (1856~1859)	安政補正改革仙府絵図	十三代伊達慶邦公 (1825~1874)	七世清水道幹 (1815~1863)

達家当主の許可を得て残月亭の扁額を模刻しこれを掲げ「残月亭」を称したこと、仙台城史跡内に移築復元されることで、何代目かの「残月亭」になる、と考えることも出来ます。これから復元される仙台城大手門や隅櫓と共に、新たな「残月亭」として、茶人に使われるだけでなく、仙台市民はもとより広くは日本国民に親しまれ、国内外から仙台を訪れる方々に仙台の歴史や伊達文化に触れて頂ける仙台城ゆかりの茶室となることを願います。

なお、十一世道鑑師は仙台城の復元などを目指している「政宗公ワールド」プロジェクトの理事を務めており、この活動の一環として「残月亭の復元」をライフルワークに決め、それに鋭意取り組み始めておられます。筆者も、三世清水道竿以来、仙台城歴代の「残月亭」で茶道頭や茶道方が行っていた当時と些かも変わらない手数を伝える当流を、仙台伊達文化の古を稽かんがえ今を照らす「心の月」として、より一層稽古に励んで参る所存です。

追 記

藩政時代から当流の歴代の茶道頭・宗家は、元来藩主の許しを得て「どうかん」と云う「道」を用いた名を名乗つ

てきました。そのため、石州流清水派の別称として道門派とも云われ（『茶道辞典』）、後に師範（格）以上の門人にも代々師匠から「道」の付いた名が与えられるようになりました。なお、二世動閑が最初用いた名は、一世道閑と同じ「道閑」で、その後二代藩主忠宗公の命により「道漠」、更に「動閑」と名を改めました。

参考文献（五十音順）

- 『安政補正改革仙府絵図【令和版】』風の時編集部
二〇一九年（令和元年）
- 『史跡仙台城保存活用計画』仙台市教育委員会
二〇一九年（平成三十一年）
- 『清水動閑註解石州流三百箇條付仙台藩茶道』十世大泉道鑑
一九八〇年（昭和五十五年）
- 『柔術西法院武安流武者捕』
柴田茂 西法院武安流武者捕保存会
二〇〇九年（平成二十一年）
- 『関』十八号 十世大泉道鑑 全日本石州流茶道協会
二〇〇八年（平成二十年）
- 『関』十九号 十世大泉道鑑 全日本石州流茶道協会
二〇〇九年（平成二十一年）
- 『関』二十号 十世大泉道鑑 全日本石州流茶道協会
二〇一〇年（平成二十一年）
- 『関』三十号 十一世大泉道鑑 全日本石州流茶道協会
二〇二〇年（令和二年）
- 『石州流歴史と系譜』野村瑞典 光村推古書院
一九八五年（昭和六十年）
- 『茶道辞典』桑田忠親編 東京堂出版
一九六八年（昭和四十三年）
- 『仙台開府四百年記念事業仙台城下現代複合図』
株復建技術コンサルタント 一〇〇一年（平成十三年）
- 『仙台市議会ホームページ』仙台市議会
会議録 平成九年第一回定例会 経済局長答弁
- 会議録 平成十一年都市整備建設協議会 建設局長答弁
会議録 令和二年第三回定例会 建設局長答弁
- 『仙台市教育委員会ホームページ』仙台市教育委員会
仙台の文化財 仙台城跡—伊達政宗が築いた仙台城—
仙台の文化財 若林城跡
- 文化財の保存と活用に関する施策 史跡仙台城跡保存活用計画

『仙台市指定有形文化財旧姉歯家住宅茶室「残月亭」修復
工事報告書』仙台市

（受託者：佐藤巧古建築研究会）一九九九年（平成十一年）

『仙台市史特別編7城館』仙台市

一〇〇六年（平成十八年）

『仙台市ホームページ』仙台市

市長記者会見（令和二年十二月一日）

仙台市の附属機関等 仙台城跡保存活用計画等検討委員会

仙台市博物館

若林区若林城・いまむかし

『伊達家治家記録』宝文堂

一九七二年（昭和四十七年）～一九八二年（昭和五十七年）

『伊達綱村茶会記』酒井巖 中央公論事業出版

一九六八年（昭和四十三年）

『茶の湯文化学』三十三号 十世大泉道鑑・十一世大泉道鑑
茶の湯文化学会 一〇一〇年（令和二年）



若林城址に咲く臥龍梅（仙台市天然記念物「古城の朝鮮ウメ」）（仙台市ホームページより引用）